写真家
## 冨塚 晴夫氏

PROFILE 1947年神奈川県生まれ。日本大学芸術学部写真学科卒業後すぐに渡米し、17年間、建築、広告、雑誌用ポートレートなど商業写真家と活躍。1986年に帰国し、山中湖に居を構え『山中湖写真ギャラリー』を設立。富士山を主体にした風景写真、広告写真を手がける。2005年にハンガリー国立美術館「FUJIYAMA」で浮世絵とともに現代の富士山写真を展示し大反響を得る。『富士山水紀行』(2016年富士フイルムフォトサロン)ほか、個展多数。富士山をモチーフにした写真コンテストの審査、写真教室の講師、写真にまつわるエッセイ執筆も手がける。

# 富士山を、あえて二次的に景観の中に置く。それで充分の、絶対的な存在だから。

### 富士山写真家になる前は ロサンゼルスで活躍

**編** 現在は山中湖にお住まいで富士山をモチーフに撮影されていますが、その前にアメリカにいらっしゃったんですね。

**冨塚** はい、大学は日本大学芸術学部の写真学科だったのですが、その頃は学園紛争の全盛期で、ちゃんと写真を勉強できた気がしなかったので、一からやり直すつもりで思い切って渡米しました。ロサンゼルスという華やかな都会で、生きていくために何でもやる覚悟でしたから、本当にいろいろなことをやりましたね。最初は、建築写真家のアシスタント。ジュリアス・シューマンという、西海岸では有名な建築写真のアシスタントとして使ってもらえて、結構可愛がってもらったんです。でも、アメリカではよくある"プロのアシスタントで終わる"というつもりはなかったので、ロサンゼルスの電通さんから仕事をいただき、日系企業の広告写真の仕事も始めることにしました。オーソン・ウェルズやカーク・ダグラスといった超一流の俳優を広告に起用するような、勢いのあった時代です。そんな流れの中でイラストレーターの長岡秀星さんと出会い、日本の雑誌の仕事を紹介していただきまして。当時の日本にはアメリカの音楽の需要がかなりあったので、マイケル・ジャクソンやイーグルスなど、結局120人くらい、西海岸の有名人を撮らせてもらいました。

**編** すごいですね!世界的に名の知れた大物ばかり!

**冨塚** 運がよかったんですよ。アメリカの有名俳優やミュージシャンは、撮影許可を得るとき本人にたどり着くまでが大変なんですが、日本の広告代理店や出版社が力を持っていた時代だったので、とてもスムーズにいったんですね。とくにミュージシャンは。「日本武道館でライブをやるのが夢」と言われていた時代ですから、日本の媒体からの取材には好意的に応じてくれて。まあ、持ち時間15分で撮らなくてはならず冷や汗をかいたこともありましたが、大スターになる人物は、自分が美しく見えるアングルをよく知っているなと唸ることも多かったです。20代30代って、人生の中でも一番元気に動ける時期じゃないですか。そういう時期をLAで過ごせたのは本当にラッキーだったと思います。

### 山中湖に居を構え 富士山を撮り始める

**編** 国際的な大スターから日本の富士山というのは、なかなか結び付かない気もするのですが。

**冨塚** 僕の生まれは神奈川県の平塚市で、小学校からは東京

の杉並区。大学まで都内にいて、いきなりアメリカに渡ったから、山中湖に直接縁があったわけではありません。でも、物心ついたときから、平塚で、地元の山の向こうにつねに富士山を見て暮らしていたので、幼稚園の頃に描いていた絵は富士山と神奈川中央交通のバスばかりだったんです（笑）。東京には「富士見」という地名があちこちに残っていますが、都会に移ってからも、当時は意外な場所から富士山がよく見えていました。日芸の写真科時代にも、実習で撮影に行きましたし、意識はしなくても、つねに自分の心の中にある山だったんですね、富士山は。

**編** そんな潜在意識に導かれて、LAから帰国することになったとき富士山の近くに住もうと思ったわけですか。

**冨塚** いや。LAでは、ミュージシャンがたくさん住んでいる丘の上の住宅街で暮らしていたので、日本では自然と一体の生活がしたいな、ということがまず頭にあって、はじめから富士山の近くを探していたわけではありません。ちょうど帰国する頃の日本はバブル期で、土地がとても高騰していて、撮影に充分なスペースの取れる“自宅兼スタジオ”を構えるのにちょうどいい土地が予算内でなかなか見つからず、それが山中湖の近くで見つかったということですね。

**編** 富士山を撮るつもりで山中湖に決めたわけではなかったのですね。

**冨塚** 最初は商品撮影や広告写真をメインにするつもりでした。都内からも車で2時間くらいで行き来できるので、青山や六本木のスタジオに通って撮影していたんです。まだバブルの余韻で、富士五湖周辺にもリゾートマンションがたくさん建つ時期でしたから、モデルハウスの撮影もよく頼まれましたね。その際に、富士山をバックに入れてほしいとか、パンフの表紙に使いたいというリクエストがとても多くて。それで自然に、個人的に富士山を撮ってみようかなと思うようになったんです。

**編** どうして目の前にあったのに、すぐには撮り始めなかったんですかね。

**冨塚** 富士山って、360度どこから見てもきっちりした二等辺三角形の美しい形をしているから、観光客が撮ってもすぐ富士山だとわかる“絵になる写真”になりますよね。だから誰が撮っても同じようなものだと思っていたんです。商品写真やポートレートのように対象をいじることもできないですし。自分のカラーが出せないんじゃないかってね。いま思うと、富士山をなめていましたね。撮り始めてみたらすっかりのめり込んでしまって、それから30年以上も撮り続けることになるとは思ってもいませんでした。

## デジタル時代への変化で<br>写真家が考えなくてはいけないこと

**編** 自らの意志で撮影し始めた富士山の写真を、個展や写真集などの形で発表されるようになったきっかけは何だったのですか?

**冨塚** 時代の流れでしょうね。デジタルカメラが普及したことで誰にでも手軽に写真が撮れるようになり、富士山を富士山らしく撮ることなら、プロ・アマの境もなくなってきました。私は撮影技術で勝負していたわけですが、カメラがよくなって技術的なハードルが低くなると素人さんの写真もある程度は使えるようになる。そうなれば、とくに地方では、媒体が限られているため仕事は少なくなりますよね。じゃあ自分の「作品」として富士山写真を売らざるを得ないのかなと思い、写真展などを開催してみようと。さらに言えば、広告の世界では、デジタルデータで写真を扱う場合、レタッチャーやデザイナーがどんどん加工して、結局写真は素材として使われるだけになり、著作権の所在すら曖

湖映　山中湖

昧になってしまうことが少なくありません。加工されることが前提で何度もレタッチされたものが最終的に使われるような写真は、僕自身、何だかつまらないなと思うようになってしまった、ということもあります。

**編** デジタルカメラの登場で、写真への向き合い方が大きく変わったんですね。

**冨塚** そりゃもう、ガラス乾板の時代にロールフィルムが発明されたとき以上のショックと言えるんじゃないですか。僕はアナログの時代に育ってきたから、撮影時の合成、引き伸ばしの合成、フィルムの現像などもすべて自分でやっていて、かなり技術志向だったんですけれど、いまはPhotoshopを使えばそれ以上のものが誰でも簡単にできてしまうわけでしょう？ デジタルカメラで写真が画像データになり、多くの人がスマホを使いこなしてネットで写真を公開し、みんながカメラマンという時代。写真の概念がすっかり変わってしまって、カメラマンをやめたプロもずいぶんいるわけです。撮る方も見る方も、写真の楽しみ方が変わってきているんでしょう。

**編** 冨塚さん自身は、最近のハイテクなデジタルカメラに対してどんな印象をお持ちですか？

**冨塚** 最先端のデジタルカメラを試す機会がよくあるのですが、ファンクション（機能）が多すぎてかえって使いにくいなと感じることがあります。そんな中、最近モニターした富士フイルムのXTシリーズは、嬉しいことに軍艦部（カメラの上の方）がダイヤルになっていてとても扱いやすい。しかもベルビアとかアスティアとかカラーネガというシミュレーションモードがあって、昔フィルムで撮っていた頃の感覚が活かせるんですね。最近、若い人たちが面白がってわざとモノクロやセピアといったモードで撮りたがることがあるじゃないですか。キヤノンやニコンなど、昔は若者が買えるようなものではなかった高級機種を中古で買ってファッションとして持ち歩いている人も、少数ですがいますよね。それはある意味、何でもかんでも先鋭化されていくことへの反動でしょうが、なかなか面白い現象だと思っています。

**編** アナログのことも知り尽くしている冨塚さんの、写真に関する豊富な知見は、メーカーなどの技術陣にとっても価値あるものなのではないですか？

**冨塚** 確かに、企業との共同研究で声がかかることはあります。たとえば、アクリル板に画像を焼き付ける『フォトナ』という製品は、小田原にある㈱スズキ・グラフィカルスタジオと共同で開発したもので、企画の最初の段階から深く関わらせていただきました。

**編** 印画紙ではなく、アクリル板の写真？

**冨塚** はい。紙焼きの写真は、湿気の多い日本だとどうしてもカビや波打ちなどによって劣化してしまうんです。写真は平面性が大事なんですが、紙には限界がある。そこでアクリル板の裏に顔料系のインクをインクジェット技術で焼き付けてはどうか、という発想で開発がスタートしました。

**編** 『フォトナ』には、具体的にどんな利点があるんですか？

**冨塚** 3メートルを超えるワイドフォーマットに引き伸ばしても高画質が維持でき、2年間、直射日光に当たっていてもほとんど褪色しません。アクリルなので軽くて丈夫で持ち運びやすく、地震などで作品が落下してもガラスのように飛散しませんし、汚れが付いても拭き取りやすいため、店舗やホテル、病院などに写真を飾るのにもいいんです。使用する側にも写真家にとってもいいことづくめで、最近は、ずいぶん活用の場が広がってきました。私自身、現在ギャラリーに飾っている富士山の写真のほとんどは『フォトナ』ですから。

**編** アクリル板は、水槽や看板や文具など、どの分野でも注目されている素材ですね。

**冨塚** アクリルを写真に応用する研究はこれからも続くと思います。反射率が高ければ高いほど画質はシャープになりますので、アクリル素材は特性的にも写真に適しています。もちろん、写り込みがある分、写真の再現に少し影響を与えてしまうという課題もありますが、現時点ではメリットの方が多いため、大きな写真展をはじめ、いろいろなところで重宝されているわけですね。

## 自分だけの写真を確立できるよう とにかくたくさんシャッターを切る

**編** 冨塚さんは現在、アマチュアの写真家向けの講座も開催なさっていますね。

**冨塚** はい。富士山の写真を撮りたい人のための少人数の講座を持っています。対象は、本当に初歩の人から、展示会なども開けるような上級レベルの人まで。基本的に「最初はモノマネでもいいけれど、だんだん自分だけの写真を確立できるようになろう」と指導しています。たとえば、気象や時刻によって現われる一瞬を捉えた“現象もの”と呼ばれる写真は、プロ・アマ問わず、何日間もずっと富士山に張り付いてチャンスを狙っていれば、凄い瞬間が撮れることはあります。でもそれが“いい写真”かというとクエスチョンマークがつきますね。写真は、その人が育った環境や培ってきた感性が表われるものだから、せっかくならその人の個性を感じさせる作品を撮らなければもったいないでしょう。

**編** 個性的な写真を撮るための、何か秘訣はあるのですか?

**冨塚** とにかく、たくさんシャッターを切ることです。露光とか絞りとか、写真には知っておいた方がいい基礎的な技術がたくさんあるのですが、いまはデジタルカメラの普及で、そういった難しいことを知らなくてもシャッターを押せば写真が撮れる時代ですから、技術的な部分はカメラに頼ってもいいんです。技術や知識よりも、その人の感性、生まれ育った環境の中で学んできたもの、感じてきたことなどを大切にして撮ればいい。自分の感性が活きた“写真の眼”を持てるようになると、同じ富士山を撮っても、それまでとは歴然とした差が出てくるのがわかりますよ。

**編** 富士山写真のコンテストの審査員もなさっていますが、応募作品に、昔といまではどんな違いがありますか?

**冨塚** やはりデジタル化の影響を如実に感じます。インスタグラムの写真も受け付けるコンテストでは、普通の写真よりインスタグラムの方が圧倒的に応募数が多くなりますしね。あと、合成写真は、写真の本質から外れるので最初から省くんだけれど、審査の途中で「いい構図の写真だな」と思って拡大してみるとジャギー感が出ていたり、また「合成じゃないか」という疑いが出てくる、というケースもあるんですね。まったくの合成ではないにしても、コントラストや彩度がつき過ぎるものは省かざるを得ない、ということもあります。

**編** 富士山を撮る難しさはどんなところにあるのですか?

**冨塚** あたりまえの話ですが、商品やポートレートとは違い、撮影の条件、気象条件を自分たちで決められるわけじゃありません。富士山そのものは絶対的に動かないものだけど、天候や状況によって見え方は大きく変わってしまう。近くからなのに見えない日もあります。感性を活かす前に、まず、そうした変化の中で撮影すること自体が難しい。

**編** 冨塚さんご自身の感性はどのように表現されていると思われますか。

**冨塚** その答えが簡単に出ないからこそ、こうして30年以上も撮り続けているんでしょうね。感性と言うか、僕の写真のひとつの特徴は、富士山を二次的なものとして写している、ということです。富士山そのものの荒々しさを撮っている大御所の写真家はすでにいますし、アマチュア写真家の中にもそういう写真に憧れる人が少なくありません。でも僕の場合は、広告の仕事から入ったということもあるんでしょう、周りの景色を活かしながらその中にポイントとして富士山を置くようにしているんです。富士山は、存在感そのものが凄いからそれで充分なんです。

飛翔　山中湖

## 富士山が起こしてくれた奇跡の数々

**編** 富士山を二次的に、と言えば、雲が主役になっている作品も多いですね。中には、何だかメルヘンな感じの雲もあります。

**冨塚** 『くじら雲』という作品は、本当に偶然、吊るし雲がくじらの形になった瞬間が撮れたものです。童話作家の中川李枝子さんの代表作『くじらぐも』（光村図書）は小学校の国語の教科書にも載っている人気のあるお話なので、この写真はとくに子供たちが喜んでくれますね。13歳の時に脳腫瘍を患った天才作曲家の加藤旭くんが学芸会用に『くじらぐも』という曲を書いて、それを知った中川李枝子さんが僕のこの写真をプレゼントしたいとおっしゃったので差し上げました。残念ながら加藤くんは亡くなってしまったんですが、『くじら雲』の写真はいまでも宝ですと彼のお母さんが言ってくださって…。童話の力、音楽の力、写真の力、みんな凄いものだなと感じさせてくれた出来事でした。

**編** それは感動的なエピソードですね。雲は刻一刻と形を変えてしまうので、本当に瞬間勝負になるわけですよね。撮り直しがききません。

**冨塚** 富士山独自の「吊るし雲」や「笠雲」、「ダイヤモンド富士」や「赤富士」といった一瞬の現象をとらえる「現象もの」を撮るときは、自分だけじゃなくもう一人欲しいので、妻にも手伝ってもらったりもしています。夫婦二人で西と東に分かれて出発して、彼女の方がきれいなシルエットの吊るし雲を撮って嬉しそうな顔で戻ってきたことも何度かありました。

**編** 奥様の裕子さんも写真家としてご活躍中なんですね。

**冨塚** もともとは写真教室で出会ったんですよ。写真がうまいから助手にしようと結婚したわけじゃありません（笑）。彼女はコンピュータに強くて、はじめは私が撮ったものを管理してくれていたんだけれど、いろいろな写真を見ているうちに本人も撮りたがるようになって、いまでは二人で撮影するのもいいことだなと思えるようになりました。

**編** 途中から夫唱婦随で写真の道を歩んでこられたわけですが、これまでのお仕事を振り返って、とくに印象に残っているイベントはありますか?

**冨塚** 私のこれまでの最大の仕事の一つと言えるのは、ハンガリーの国立美術館（王宮）で2005年に開催された『FUJIYAMA』展ですね。浮世絵の富嶽三十六景と、僕が写真で表現した現代の富嶽三十六景を同時に展示するというものでした。もともとは、ハンガリーの映画監督が僕の写真を気に入って購入してくれて、その繋がりで、大使館を通じてオファーが来たのです。ハンガリーといえばロバート・キャパをはじめ偉大な写真家や映画監督をたくさん輩出した国。その国立美術館で展覧会が開けたのは幸せなことだと思います。ハンガリー人は哲学的な民族で、すぐ議論をしたがるんです。食事をしていてもマジャール語で突然語り出すのですが、こちらは言葉がよくわからないまま聞いているふりをするしかできなくて（笑）。そんな状態で1カ月ほど滞在し、その間、1万6000人ものお客さんが来場してくれたんですよ。地元のテレビ局がドキュメンタリーも作ってくれました。食べ物は美味しかったし景色もきれいだったし、一生の思い出です。

## 世界遺産登録で再認識される富士山の美しさ

**編** ところで、5年ほど前に世界遺産登録されてから、富士山の存在に何か変化は感じられますか?

**冨塚** 日本人みんなが富士山を、さらに身近に感じ、さらに誇りに感じるようになったんじゃないですか。いままで以上に愛着を持って見てくれるようになったのを感じます。おかげさまで仕事も増えました。富士山って、見えればそれだけで誰もがみんな嬉しくなる。おそらく日本人で嫌いな人はいないですよね。

**編** 写真の被写体、という観点ではいかがですか?

**冨塚** 富士山写真に関して言えば、これまでは年配の人が中心で、若い人はあまり乗ってこなかったから、やや翳りを見せていたんだけれど、世界遺産ブームやインスタ映えも含めて、若者の間でも新たに被写体として注目されてきていますし、もっと活発になっていけばいいなと期待しています。

**編** 海外からの注目も高まっていますか。

**冨塚** 海外の人にも富士山の美しさはインパクトがありますよね。この辺りには、海外からのお客様に富士山の写真集を贈っている企業も多いです。美しい日本の象徴を紹介する、という意味合いだけでなく、こんなにいい環境で仕事をしている会社なのだというアピールにもなるんだそうです。いま、世界的に環境問題には敏感になっていますからね。中には3メートルを超えるような大きな富士山の写真を飾ってくれる企業やミュージアムもありますよ。

## 富士山のこれから<br>写真のこれから

**編** 冨塚さん自身はこれからどんな富士山を撮っていきたいですか。

**冨塚** 作品として、もっともっと自分のカラーを出していきたいという気持ちはあります。その一つの方向として、実は、女性と富士山を組み合わせたシリーズを企画しているんです。昔アメリカにいた頃、たとえばかつて存在していたワールドトレードセンターのツインタワーだとかグランドキャニオンだとか、アメリカや日本の「象徴的な風景」と、若い女性の「能面」を組み合わせたシリーズ作品で写真展を開催したことがあったんです。それを今回新たに、能面ではなく生身の女性と富士山の組み合わせでやってみたいなと思っていたんですが、神聖な富士山を女性と組み合わせるとは何事か! と非難されてしまったんですね。俗っぽい意図なんて全然ないのに。能面はちょっと傾けただけでも表情が変わって写るので、生身の女性ならもっと変わるだろうと思って。いまでも諦めず、できるだけ日本的なものを感じさせる女性モデルを探しているんですがなかなか見つからず実現していません。人間が富士山にどれだけ対峙できるのか、そういう写真を撮りたいという気持ちはあります。

**編** しかし富士山は神聖で絶対的な存在だという気持ちが根強くあるんでしょうね。永遠に、変わらず日本人の心に存在するものだと。

**冨塚** でも「富士山は変わらない」というわけではなく、山中湖に30年も住んでいると、明らかに地球温暖化の影響による変化を感じますよ。何と言っても富士山が見えにくい日が増えました。富士山は敏感なんです。晴れの日の夜は放射冷却で地表が冷え翌日はクリアに見えるけど、そうでない日は靄がかかって近くからでも見えなくなってしまう。吊るし雲とか笠雲といった、富士山独特の雲が出ることも減ってしまいました。気温や雨、台風などの気象条件が急速に変わるため、撮影に適した状況かどうか、以前と同じようには予想しづらくなっています。赤富士の見えるチャンスも、どんどん減っていくのではないでしょうか。

**編** 異常気象とは別に、世界各地で火山活動が活発化していますよね。

**冨塚** 富士山の美しさが永遠とは限らないんです。火山の中では若い山なので、これからいつ噴火してもおかしくありません。十年くらい前にかなり大きな火山性地震もありましたからね。私ももう70歳を超えているので、自分の目の黒いうちは大丈夫かなと思っていましたが、週に一度ぐらいは、対策とかニュースとか富士山の地震関連の記事が載るわけです。御嶽山と同じで、ある日いきなり爆発するかもしれない。それでもやっぱり撮り続けたい。終わりの見えない魅力的な被写体、それが私にとっての富士山です。今後の変化が気がかりではありますが、これまで30年以上にわたりさまざまな表情を見せてくれたことに、心から感謝しています。

冨塚さんと夫唱婦随で富士山を撮り続ける冨塚裕子さんの個展が開催されます。

**2019年1月18日～24日　冨塚裕子写真展『朝な夕なに 富士山とともに』**
《富士フイルムフォトサロン東京（東京ミッドタウン）》　詳細はこちら→Click!